

中国の国史(研究/教科書)において語られる東アジア
——十三世紀以降東アジアにおける三つの歴史事件を例に

復旦大学 葛兆光

「レジュメ」本稿は 13-16 世紀における東アジアで起こった三つの歴史事件、つまり「蒙古襲来」(1274,1281)、「応永の役」(1419)、「壬辰丁酉の役」(1592,1597)を例にして、国別史と東アジア史の差異を論じようとする。もし、単なる一国の歴史の立場や視点から東アジアの歴史を見る場合、「死角」や「盲点」がしばしば出てくると本稿が指摘している。なぜかという、一つの円心(国)の歴史を語る場合、語られた歴史は中心と周辺があり、中心部は明晰でありながらも、周辺部はしばしばぼんやりと見えてしまうからである。実は、周辺の歴史は必ずしも重要でないとは限らない。歴史を語る場合、もし若干の円心があれば、幾つかの歴史圏が形成し、その歴史圏が交錯する中、重なる部分もかなり見えて来る。その重なる部分もかなりの意味があり、歴史を見直させられる価値があると思われる。

一国の歴史を語る場合、そのようなところをしばしば見逃されるが、東アジア史を語る場合、この歴史圏の重なる部分を浮き彫りする必要があると思う。

「キーワード」蒙古襲来 応永の役 壬辰丁酉の役 国史 東アジア史

近世の東アジア史、特に 13 世紀以降の歴史において、ある事件は一国史にとってその重要性はそれぞれ違うが、東アジア史にとっては相当重要であるかも知れない。

それらの事件の中に、私は「蒙古襲来」(1274,1281)、「応永の役」(1419)、「壬辰丁酉の役」(1592,1597)という三つの事件を取り上げて論議したいと思う。上述の三つの事件はすべて東アジアの中日韓三国の歴史に関連したので、一国史の国史が如何にそれらの事件を描くかを観察すれば、「国別史」と「東アジア史」との違いを見つけるかもしれないし、自国の立場を固持すると、歴史研究には何かの「死角」や「盲点」も出てきることが分かるようになるであろう。

以下は、私は中国において最も代表的な国史著作①翦伯贊の『中国史綱要』、②范文瀾の『中国通史』、③郭沫若の『中国史綱』、④白寿彝『中国通史』を主な研究対象と選択して、同時に中国大陸・台湾・香港で出版された歴史教科書を参照しながら、中国の通史類の著作、とりわけ歴史教科書を簡略な分析を行うことにする。

—

「蒙古襲来」(文永・弘安の役)は、日本の歴史においては謂うまでもなく第一等の重大な事件である。川添昭二は『蒙古襲来研究史論』のなかに、その侵入事件は最後に嚴重な征服または植民地になってしまう結果にならなかつたが、日本人の歴史記憶に多大な陰影を投じたと指摘した。したがって、それ以降の日本の歴史文献には関係回想や想像または描写は繰り返された¹。日本史研究者の代表者である原勝郎も、中国史研究者の代表である内藤湖南も、この二人

¹ 川添『蒙古襲来研究史論』(東京雄山閣、1977)は蒙古襲来という事件が日本に残した深刻な影響について詳しく論じられた。その研究によると、早くも 1293 年前後既に肥後国武士竹崎季長の武功を描いた『蒙古襲来絵詞』(京都東山御文庫蔵、二巻)がある。その後の江戸時代、臨濟宗僧侶の瑞溪周鳳の『善隣国宝記』(1470 年増補)、儒医の松下見林の『異称日本伝』(上中下三巻、1688 年の自序あり)、津山元順(?~1784)の『蒙古襲来記』及びその養子の津山元貫(1734~1815)の『参考蒙古入寇記』などがその事件についての記載がある。その以降、更にさまざまな関係書籍が、例えば『元寇始末』『蒙古寇記』『蒙古諸軍記弁異』『元寇記略』などが出版された。

とも、この事件は日本歴史には重要であると見ている。彼らの分析によると、この事件によって、日本文化は独立の端緒が開かれた。それから、日本は初めて「神国」と思われるようになり、日本人は意志的に自国の文化を発展させ、中国中心の「華夷秩序」から離脱して所謂日本型の「華夷秩序」を形成したわけである。

または 13 世紀より 14 世紀かけての高麗にも、蒙古という要因は、その歴史に重大な意味を持つものである。蒙古にコントロールされた高麗時代では、蒙古人が日本を侵略する際、高麗はその前線基地になってしまい、また蒙古帝国が四辺へ進出する際も、高麗人は頻りに徴兵され、高麗女子も蒙古人のために献身するよう求められ、耽羅というところも蒙古人の馬を飼う牧場となってしまった。さらに、高麗は蒙古から妃を娶らなければならないし、人々の名前も蒙古化させられ、官吏も蒙古風の髪型にさせられ、国全般は「蒙古化」されてしまった²。したがって、朝鮮史においても、蒙古侵入は大きな歴史事件である。

しかし、中国の歴史著作の中に、蒙古/元朝は「自国史」と見なされたため、以上のような事件はしばしば「中外関係史」の枠に盛り込まれた。これは「自国」の歴史だから、隣国への侵略とは認めざるが、奇異なところでは、中国の歴史研究者は蒙元を自国の一王朝と見なし、それで蒙古と日本や高麗との間起こったこれらの事件を「中外関係」の枠に盛り込み、重くは見ていないようで、一方、以上のような侵略や拡張行為を意識的か無意識的か、「蒙古帝国」の行為であると見なしている。蒙古人はユーラシアに亘る大帝国を樹立するため、このような拡張行動があるからと。

総じて言えば、この事件は中国の歴史叙述の中に、たいした事件ではないようで、ただ「中外関係」の枠の中に起こった微々たる事件に過ぎない³。殆ど簡略な叙述に過ぎない⁴。たまたま分析があっても、不思議な言論が交じっている⁵。

二

所謂「応永外寇」(1419)は日本側の言い方である。14 世紀の下半期、東アジア政局全般は重大な変化が見える。中国の場合は、元王朝が明王朝と更迭し、蒙古帝国が漢民族の王朝に変わった。高麗の場合、高麗が朝鮮に変わり、李成桂が新しい朝鮮王国を建てて大明帝国に認められた。日本の場合、足利義満が分裂状態を終え、統一を実現し、さらに、明の朝貢体制

² 宮崎市定が言うように、「中世以降、朝鮮が最も外国化された時代はこの時(高麗忠烈王以後)である」。宮崎市定『中国史』(中国語訳、浙江人民出版社、2015 年)第三篇「近世史」の三「元」、237 頁;辛顯王時代(1376 年、明王朝成立してから 8 年目)になっても、高麗は依然として北元の年号「宣光」を使い、使者を北元へ派遣した。同時の高麗では、「町の中には蒙古風の服(胡服)や髪形をしている人は既に多くなった。」明王朝の使者が来る時、当局は慌しく「胡服」の禁止令を出し、「明の制度により百官冠服を定められた。」呉喆が整理した『李朝実録の中の明清に関する資料』第一冊、76-79 頁。

³ 翦伯贊の『中国史綱要』(北京大学出版社、増補本、2006)下 449 頁、「元朝対外関係」を語る場合、「元世祖の時、数度兵を挙して近隣国家へ侵入した」、「元十一年(1274)、十八年二度と日本へ出兵」という表現しかない。また、『中国史稿』(人民出版社、1983)では、400 字の叙述があるものの、「元三年から元十年に、前後五回使者を派遣して日本の来朝を勧誘したが、何れも日本政府より返答を拒絶された。」という表現があった。二回の戦役について叙述はしたが、特に分析などはしていなかった。範文瀾の『中国通史簡編』(河北教育出版社、2000 年増刷)下には、「日本東征」の事件に殆ど触れなかった。今日に至っても、最新の各種の歴史著作、例えば李学勤・郭志坤編著した「中国歴史詳述叢書」の中の温海清著の『元史』(上海人民出版社、2015)もこの事件を無視している。

⁴ 対照的に、西洋の学者、例えば Timothy Brook が元明の歴史を書く場合、「蒙古来襲」の意義を取り立てている。Timothy Brook: *The Troubled Empire: China in the Yuan and Ming Dynasties*, "History of Imperial China 5", Harvard University Press, 2013.

⁵ 例えば早期出版のある有名な中国歴史教科書、即ち繆鳳林の『中国通史要略』(南京鐘山書局、1933、商務印書館、1946)の第八章には、この二回の戦役を通して「日本人は蒙古兵の武威を震え、その後ことなし云々」116 頁。

に加入しようという姿勢を示した。明王朝の初期、特に政権が樹立したばかりの洪武朝、国際協調の政略を確立し、若干の「遠征しない国」のリストを作り上げ、東アジア三国からなる「国際」は新しい時代を迎える。

しかし、永楽皇帝は洪武朝の「国際協調」の政策を変え、安南に兵を用い、朝鮮へ圧力をかけた。一方、李成桂と足利義満が1408年に亡くなるにつれて、日朝双方の政策にも変化を見た。後継者の足利義持はその父の政略をチェンジし、足利義満時代の穏健な外交方式を一変し、朝鮮に対しても見下げるような傲慢な態度を採った⁶。しかし、義持の意図したとおりにことは運ばない。李朝の太宗も態度強硬な国王で、かえって1419年に日本の対馬へ侵攻を始めた。これは日本で「応永外寇」と呼ばれ⁷、日本の朝野に大きなインパクトを与えた。この事件を当時の「蒙古来襲」と同じくらい大きな危機を日本にもたらしたと思う人さえもいた。朝鮮と大明の連合によって日本が両側から敵の攻撃を受けることを避けようとして、日本はやむ得ず外交政策を調整しなければならなかった⁸。この年の十二月、戦争問題を解決するため、日本は博多妙楽寺の僧侶無涯亮出倪を朝鮮へ派遣、両国の関係はようやく緩和された。この事件はその後のバランスの取れた東アジア国際関係を再構築する大きなきっかけとなったと私は見ている。

何故この事件が東アジア史にはきわめて重大な事件であるといえるか。事実上、この事件の背後に明の影が見え隠れている。朝鮮の出兵は言うまでもなく明から支持、少なくとも黙許を得たはずである。当年、明太宗は朝鮮にたいして、朝鮮にとって当面の用務は倭寇を治めることだと言い張った。住民を沿海地域から内陸部へ移住させる一方、軍隊を動員して日本が占領した島を取り囲んで敵を残滅するよう、明は朝鮮へ提言した⁹。明の永楽時期になると、明成祖は更に明太宗の国際協調政策を大幅にチェンジし、対外強硬策に転じた。朝鮮から「日本が戦艦を製造して中国を侵攻しようとする」という情報を受けたため、日本への不満も高まった。日本が朱元璋の画像を的にすると言う口実を作って、明成祖は「万隻の船を派遣して討とう」と威嚇した¹⁰。後に、朝鮮が進んで対馬を武力で占拠したことも、これとは関係あるであろう。同じ年(1419年)の六月、明の総兵(統帥か)劉江が遼東半島の望海峯で上陸する倭寇を全滅させたことも朝鮮の出兵とはある程度の呼応関係があると思われる¹¹。そういう事実から、日本はちゃんせんの対馬出兵の背後に明の影があると警戒した。

応永の乱以降、日本と朝鮮とはお互いに妥協したことは、日本、朝鮮と明を含む東アジア全

⁶ たとえば、朝鮮に対して「国王」を使用せず、「征夷大將軍」と自称し、国書にもただ「日本国源義持」と記し、つまり日本の大將軍は朝鮮国王とは対等な関係であると示し、更に日本への朝鮮国書に明の「永楽」年号を使用することに不満を漏らす。もし、朝鮮が自国を明の従属国に下げたら、日本も同様に明の従属国に下げられてしまったのではないかと足利義持が思う。

⁷ 朝鮮の太宗は対馬襲撃を通して倭寇問題を根本的に解決しようと思ったらしい。戦争中、双方の死傷者は3800人になり、対馬藩の若い藩主が朝鮮に講和を申し出た。朝鮮は対馬を慶尚道の版図に入れ、対馬の住民も巨濟島へ移動させた。

⁸ 「蒙古来襲」の記憶がまだ強く残っているためか、日本は依然として中国へ高い警戒心を持つ。李朝朝鮮の『世宗実録』卷十(1420年)に使者団の通事尹仁甫の「復命書」が収録される。その中に「臣等初到其国、待之甚薄、不许入国都。馆于深修庵。……继有僧惠珙来问曰：闻大明将伐日本、信否？答曰：不知也。珙曰：朝鲜与大明同心也、何故不知。先是、大明使宦者敕曰：若不臣服、与朝鲜讨之。继而使者畏害而逃、故疑而问之」という文言があった。

⁹、故疑而问之”。

⁹ 吴晗辑《朝鲜李朝实录中的中国史料》(北京：中华书局，1962)第一册，洪武二十年(1387)，73-74页。

¹⁰同上，第一册，永乐十一年(1413)，255页；永乐十四年(1416)，265页。

¹¹这一年(永乐十七年，1419)六月，明朝与日本之间也出现冲突。《明史》卷三二二《外国二·日本》中记载较详细，“倭船入王家山岛，都督刘荣率精兵疾驰入望海峯，贼数千人分乘二十舟，直抵马雄岛，进围望海峯。荣发伏出战，奇兵断其归路。贼奔櫻桃園，荣合兵攻之，斩首七百四十二，生擒八百五十七”。8346页；《明实录》中，“都督刘荣”作“都督刘江”，说“辽东总兵官中军都督刘江以捕倭捷闻”，在望海峯“擒戮尽绝，生获百十三人，斩首千余级”，《明太宗实录》卷二百十三，2141-2143页。又，可以参看明代严从简《殊域周咨录》中的“日本”部分。

般を最終的にバランスの取れた新しい国際局面へ向かわせる大きな事件であるといえる。しかし、この事件は中国の歴史著作に殆ど記載されていない¹²。で、東アジアにおいてこんな大きな事件が何故中国の歴史叙述に欠席になったか。検討する必要がある。

三

「壬辰の役/文禄の役」(1592)とその後の「丁酉の役/慶長の役」(1597)は、上述の蒙古ー日本、日本ー朝鮮間で起こった事件と比べれば、東アジアの中日韓三カ国共に全力を挙げて直接に参与し、投入した兵力も莫大なので、この戦争は三ヶ国とも文献に多くの記載が残り、後世の各種の国史にも、詳しい叙述がある¹³。

しかし、この戦争についての呼称はそれぞれ違う。韓国ではこれを「壬辰倭乱/丁酉倭乱」と呼ぶ。日本ではこれを「文禄の役/慶長の役」と呼ぶ。中国ではこれを「万曆東征/抗倭援朝」と呼ぶ。呼称がい違う背後に、それぞれ立場の明らかな違いも見えてくる。各国の歴史文献に残る記載が違うほか、現代の歴史叙述もそれぞれ異なる。中国の歴史著作では、豊臣秀吉の出兵を野心膨張の結果、東アジアで大帝国を樹立しようとする「侵略」と見ている¹⁴。その点から言うと、朝鮮と中国の歴史著作にほぼ同じであるが、日本さえも「侵略」を否定していない。しかし、戦争についての描写は、各国は自国の歴史文献に基づいて、立場も違うし、同じ「壬辰の役」に関して、叙述に微妙な差がある。例えば、日本の場合、壬辰の役については、朝鮮の妥協と日本の強硬を浮き彫りにしている。日本側が出した講和条件は①明の皇帝の娘は天皇と結婚、一種の「和親」関係を結ぶこと；②明は日本と勘合貿易を行うこと；③朝鮮南部を日本へ割譲だそうである¹⁵。あせって講和しようとする小西行長が当時以上の意思を十分伝えられなかったため、1596年勝者気味の明が日本へ使者を派遣して豊臣秀吉を「日本国王」と冊封し日本の朝貢を許す結果に導いたそうである。それで、豊臣秀吉がかつとなって二回目の戦争(1597-98)を引き起こしたそうである¹⁶。それに対して、中国側の記載は、そういう内容は全く見当たらない。それどころか、中国通史類の著作には、ただ豊臣秀吉が壬辰の役で失敗したも、「野望が亡ばずに、捲土重来のため、わざと明に講和を求め、明の撤兵を狙って新しい攻撃を準備する」と叙述した。明も妥協して、それで「豊臣秀吉のわなにはまって、守勢に回ってしまった」¹⁷。

¹² 郭沫若、翦伯赞、范文澜の著作にこの事件についての叙述は皆無である。殆どの中国の歴史著作はこの事件を無視する。

¹³ 中文论著最详细的研究是：李光涛《朝鲜“壬辰倭祸”研究》(中央研究院历史语言研究所专刊之六十一，台北，中央研究院史语所，1972)。日文论著方面，可以参考：石原道博《文禄、庆長の役》(东京：塙书房，1963)；因为不懂韩文，我仅参考了已经译为中文的崔官《壬辰倭乱——四百年前的朝鲜战争》(金锦善、魏大海中译本，北京：中国社会科学出版社，2013)，但此书主要讨论壬辰之役的影响，尤其是在日韩文化与文学中的影响。

¹⁴ 翦伯赞《中国史纲要》下册 531-532 页，对此有近千字记载，但主要说的是(1) 丰臣秀吉侵略朝鲜，进一步侵略中国，(2) 1593 年打败日军最精锐的小西行长军队，收复平壤与开城，日军退守釜山，(3) 石星妥协求和平，1597 年日军再度入侵，(4) 丰臣秀吉死，日军于朝鲜南海被灭，战争胜利。结论是“日本侵略朝鲜战争的失败，主要是由于朝鲜人民的坚持抗战，而明军的两次援助，也起了重大的作用”(532 页)。郭沫若《中国史稿》第六册，572-578 页。主要根据吴晗《史料》、《明史》、《明史纪事本末》等中朝文献，对整个过程做了更加详细的记录，对于第一次援助朝鲜，与翦伯赞书不同的是，承认只是“形成对峙局面”。但是此书基本不用日本史料，偶尔使用日本方面的论著如林泰辅《朝鲜通史》，还误以为林为朝鲜人。

¹⁵ 这一点在历史资料中就已经有差异了。如万历二十四年(日本庆长元年，1596)，明朝派正使杨方亨、副使沈惟敬，赴日本大阪见到丰臣秀吉，据日本文献记载，丰臣秀吉曾经提出“七条”苛刻要求。但在明朝记载中，却似乎是日本求和，明朝居高临下，让日本从釜山退兵，不得再侵略朝鲜，册封日本国王之后，再谈互市问题，对照之下，与丰臣秀吉的“七条”差别太大。以上可参考《明神宗实录》、宋应昌《经略复国要编》、诸葛元声《两朝平壤录》等。

¹⁶ 参看佐藤信等《(改订版)详说日本史研究》(山川出版社，2012)，234 页。

¹⁷ 翦伯赞《中国史纲要》(下)，552 页。

いうまでもなく、現代の一国の歴史著作は、(国の)自尊のため、それぞれ自分が強調したい一面を強調している。中国の歴史著作のように、中国の援軍が朝鮮の運命を救う重要性を強調する一方、明の援軍(朝鮮も含め)の日本に対する勝利をも誇張している。

四

もし我々は国家/王朝の立場を超えまして、東アジア史の視座から、東アジア全体の視角から以上の三つの歴史事件を見直せば、以下二点の結論を出せるのではないか。①蒙元の日本侵略(または高麗を従属国にすること)は、東アジアの政治局面に変化をもたらすにのみならず、文化の面においても各国の自我の意識を喚起し、東アジアでは「中国を中心にする」風潮が続けられなくなる。政治的には朝貢あるいは冊封体制、文化的には漢・唐・宋の中国を習うあるいは模倣する風潮が次第に変わっていき、政治上の自国中心主義と文化上の独立意識が芽生えてきた。②「応永の役」の発生及びその解決は、東アジア三カ国の間、再度のバランスが取れた関係に、またはその後の百年ないし数百年の東アジア国家関係の安定に導いた。朝鮮の「事大主義」を軸に、明と朝鮮の間は「朝天」を通して朝貢体系を継続する一方、日本と朝鮮の間は「通信」を通して対等の国家外交を継続した。それに陸路と海路両方の貿易も加えて、明清中国、李朝朝鮮、藩政日本の間、豊臣秀吉の朝鮮侵略時期を除けば、全般的に長らくバランスが取れていた。西洋人が東洋へ進出する前、基本的に安定的な東アジア国際秩序が続いた。しかし、「壬辰の役」の発生は、それまでの安定した東アジア国際関係を大きく揺らしたし、その後の東アジアが共有するアイデンティティーの崩壊にも伏線を張った。しかし、当時はこの事件が速やかに収まり、東アジアの世界もまた「壬辰/丁酉の役」以降構築された国際局面に戻った。上述するように、その局面は 19 世紀西洋諸国が武力を背景に東洋に進出して、東アジアを欧米が主導する新しいグローバル秩序に引きずるまでに続いた。

が、もし歴史学者が単なる自国の立場を固持し、視野を現代国家の国境線に限定して地域の連動関係を考えなければ、歴史には必ず「死角」や「盲点」などが出てくる。中国の歴史著作は、蒙元の日本侵略と高麗支配はただ蒙古人/蒙元王朝の世界支配の野心の現われに過ぎない、朝鮮の対馬への侵攻も只隣国同士の紛争だと言い張り、「壬辰/丁酉の役」に至ると、日本は侵略者であり、中国は朝鮮の国際的な友人であり、両国が手を携えて日本侵略軍を打ち負かしたと明言する。しかし、もし歴史学者が以上の話題を東アジア史の視野の中に入れて見直せば、新しい認識が出てくるのではないか。

とにかく、東アジア史と国別史の違いから、歴史の叙述はもし一つの円心(国)だけでしたら、その叙述は必ず中心と周辺があり、中心が明晰で周辺は常に朦朧になってしまうということが分かる。歴史学者がもし焦点を常に中心に当てると、周辺はしばしば忘れ去れるし、あるいは捨ててしまう。しかし、歴史の叙述はもし幾つかの円心があれば、幾つかの歴史圏を設定すれば、これらの歴史圏の交錯するところに、幾つかの重なる部分が見えてくる。東アジア史は幾つかの歴史圏の交錯からなると思う。数年前、私は「周辺から中国を見る」と唱えた。実は「周辺から日本を見る」「周辺から韓国を見る」「周辺から蒙古を見る」とも私が唱える。今のところ、私はむしろ「アジアの中の中国史」を書くべきではないかと強く思っている。私はこれらの交錯する「周辺」から歴史うを見る、拡大した「アジア」の中に歴史を見直すべきだと強く願ってる。そうすれば、色々異なった風景が見られるのではないか。一人の歴史学者として、歴史がまだ形作られていない(つまり著作という形になっていない)現場で歴史を想像すべき、または国家の国境線(現代国家の国境線は後に形成したものである)を超えて、広い視野の中に歴史を観察すべきだと思っている。もし、ただ今の国家の国境線を固持して古代の交錯した歴史を遡ると、往々にして、固定したあるいは固持した「中心一周辺」の歴史構図になってしまい、「周辺」も忘れら

れてしまう。今の「周辺」は当時の「中心」であるかもしれない。ですから、自国中心の歴史叙述は、政治－文化の価値観の歴史的な差異があるため、歴史評価の偏りも生じ易い。

2016年7月
(徐静波訳)